紙 碑

松村祝男先生のご逝去を悼む

2012年３月29日，突然の訃報が届いた。本会前会長松村祝男先生御逝去。松村先生の優れた研究と豊かな人柄に触れた多くの人々にとって，この日は生涯忘れることのできない痛恨の日として心に刻まれることになったに相違ない。

松村先生は，静岡県静岡市，否，東海道清水港の出である。先生の情誼に厚く人情に脆い，人々の心をとらえずにはおかない魅力的な人柄について語ろうとするならば，出身地はやはり東海道清水港でなければならない。

先生が生を受けたのは，太平洋の戦局がいよいよ急を告げ始めた1943（昭和18）年１月のことであった。父親は戦時中に死亡，父の顔も知らず母親の手一つで育ったという出自は，先生を人一倍母親思いの，そして家族思いの人物に育て上げたものと思われる。

私は今，ちょうど40年前に行われた先生の結婚式の情景を思い起こしている。私の脳裏には，このとき，先生の母上，姉上が，我が子，我が弟の幸せ一杯な姿に，心の底から喜び，家族としての幸せをかみしめている姿がよみがえってくる。

温かな愛情に包まれて少年時代を過ごした先生は，1961（昭和36）年，静岡県立清水東高校から日本大学文理学部地理学科に進学した。翌年に入学した私が，サークル活動として入った「地理研究会」ではじめて出会ったとき，先生はすでに，当時の学生の一般的な水準をはるかにしのぐ文化性と開明性を具えた青年に成長していたように思う。先生は，われわれ新入生の前に，頼れる先輩という信頼感と共に，あこがれをも感じさせる眩しい存在として立ち現れたのである。

当時は学生が海外旅行をすることなど，思いもよらない時代であった。しかし先生は，高校時代に静岡ボーイスカウトの幹部としてアメリカに招かれ，カリフォルニアはじめ各地を歴訪していた。そして，自家用車を持つことなど夢のまた夢であり，運転出来る学生は皆無に近かった当時，運転免許証を取得していた。スポーツも万能であり，高校時代に剣道２段の免状を得ていた。さらに，書道の免許を持ち，それになんと製図のプロとしての技術をも身に着けていたのである。

こうした事実は，先生が高校までの少年時代を如何に有意義に，建設的に過ごしたかを示しているが，先生が身に付けたこれらの能力は，その後の研究生活に大きく役立つことになった。自動車を運転できることによって獲得した機動性，全て手書きの時代，図版を自ら望むとおりに如何様にも製作できる能

力，そして剣道で鍛えられた健康と精神力，いずれもそれこそ地理学の研究のために計画的に身につけたのではないか，と思わせるほどの整合性を持って，総合的に先生の研究を支える役割を果たしていったのである。

そうした典型的な一例を，先生が大学院生時代に発表した論文に見ることが出来る。1969（昭和44）年，日本国際地図学会機関紙「地図」（7－4）に発表された「空中写真利用による地理的現象の把握方法について」と題する論文は，静岡県清水地域を事例として，みかん園の樹齢を空中写真から判読する技術を開拓したものである。このとき先生は，足しげく現地に通い，広大な対象地域内のみかん園を自動車でくまなく動き回り観察し，空中写真で読み取れる特徴をとらえていった。もちろんこの論文に掲載された詳細な分布図は，全てご自身の手書きによるものであった。

先生は私たちに出会った当初から，自分は静岡の出身だから卒業論文はみかん栽培をやりたい，という思いを語っていた。先生のこの思いが，その後の生涯を通して持続されたことは，多く人の知るところである。

研究者として先生が見据える視線の先には，常に行きつくべき大きな目標が捉えられていたように思う。そしてそこに至るために組み立てられた周到な戦略と，それを実現する着実な実行力が，優れた研究成果を次々と生み出させる原動力となったのであろう。

2007（平成19）年，先生は大著『果樹作と庶民と地域の近代化―河内みかん発達史―』（瀧渓書舎）を上梓した。この研究は，これまで，研究対象とするもろもろの現象を生み出す原動力が，地域であり地域住民であることを，ややもすれば見落とすきらいのある研究動向に，大きな一石を投じるものであった。「旧来型の耕種農業地域にみかん作が導入される，それは資本投下や技術の導入などだけに着目する従来の研究方法では十分な説明には至れない。地域の近代化，そして地域住民自身の近代化があってはじめて投下される資本も，導入される技術も生きた形で地域に受け入れられるのだ。」ビールのグラスを傾けながら熱っぽく語る姿が思い出される。

先生が持ち続けた「地域の近代化と果樹作の展開」という研究のモチーフ，これも実は大学院生時代に形作られたものである。

1971（昭和46）年，日本大学大学院を修了した先生は，千葉商科大学に講師の職を得られた。この年，先生が作成した科研費の申請書に記された研究テーマは，まさしく「地域の近代化によるみかん作の導入」というものであった。

1981（昭和56）年，先生は熊本大学に助教授として転出する。この事実を知らされた時，私は驚きの言葉を禁じえなかった。なぜなら，上記科研費の研究対象地域が，まさしく「熊本市周辺地域」であったことを思い起こしたからである。

先生は6年間の熊本大学在任中，大学院生時代から抱き続けてきた目標を，見事に実現した。その努力の成果が，前記の大著であった。

私はかつて，日本大学文理学部の歴史分野の教授で，日本学士院賞を受賞した研究者が，学内大学院生を前にして行った記念講演を聞いたことがある。講演の要旨は，「今回私が受賞した研究は，私がちょうど皆さんと同じ年齢の時，つまり大学院生の時に着想し，以後今日まで積み重ねてきたものである。大学院という時期は，研究者にとって最も大切な時期である，と私は思う。皆さん，どうか今の時期を有意義に過ごし，生涯の研究テーマを掴んでもらいたい。」というものであった。

若いころにレベルの高い着想を得ること，実り豊かな成果をあげる研究者には，こうした共通する特徴が見出されるのではなかろうか。

1988（昭和62）年，熊本での研究生活を成功裏に遂行した松村先生は，出身校である日本大学に戻ってこられた。勤務先は経済学部。高い学識，柔軟かつ新鮮な思考能力，ボーイスカウト以来の的確な指導力，そして誰にでも信頼され好感をもたれる人柄。経済学部がこうした人材を放っておくわけがない。先生は，本年1月体調を崩して退職されるまで，学部のそして日本大学の数々の役職を経験することになる。しかし，そうした多忙な日々の中にあっても，先生は常に教員の本務である研究と教育を最優先にする姿勢を崩さなかった。

そして学会活動にも熱心に取り組み，その中心的活動舞台となった歴史地理学会では，評議員・常任委員を長年にわたって務めたのち，2005年から2008年には常任委員長を歴任，次いで2008年から2010年には，会長に就任し，学会創立50周年の諸行事を成功裏に遂行するとともに，破綻しかけた学界財政の立て直しに敏腕をふるっている。

松村先生は生涯にわたって教育に情熱を傾け，とくに学生を大切にされた。先生ご逝去後も，その人徳を慕う教え子たちが，世代を超えて全国から大勢訪ねて来るという。

本年４月１日，葬儀は先生のお住まいの近くでしめやかに執り行われた。

その後まもなく，私は先生の奥様から心にしみるお手紙をいただいた。それは控え目な言葉の中に，故人への深い愛情と哀惜の念がしみじみと感じとられる手紙であった。

温かな家庭で育った松村先生は，奥様と共に愛情豊かな家庭を築かれ，そして愛する家族に囲まれながら旅立っていったのである。

松村祝男先生，どうぞ安らかにお眠りください。

（島方洸一）